

学位論文要旨

東アジアの民話を巡る教育文化史研究

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期
学習開発専攻 カリキュラム開発分野

D152877

黒川 麻実

I. 研究の背景

これまでの国語科教育研究における教科書教材史的研究は、様々な領域においてそれぞれの問題意識や視点・方法から取り組まれており、研究成果の蓄積がなされてきた¹。その背景には国語科教科書という媒体が子ども達の内面形成に深く関与し、また子ども達を取り巻く言語文化を牽引したメディアであることが影響している²。国語科教科書の歴史の変遷から見える景色の先には、教育内容の措定の様相、同時代の言説や文化史、そして我が国における「国語」醸成の過程など、現在とは無関係ではない問題が様々に散りばめられている³。このようなことから、国語科教科書や内包されている教材に関わる歴史的研究は、通時的にも共時的にも自己の今いる位置を見定め、未来の国語科教育の在り方を模索していく上で、非常に重要な研究領域であると言える⁴。

一方、国語科教育研究者以外の文学研究者や歴史研究者からは、国語科教科書に掲載されている教材の歴史的背景が十分に検討されていないという指摘がなされ、教材の歴史性への視点を欠いた国語科教育研究の態度が、国語科教材をお馴染みの定番教材の正当性へと随し歴史を忘却するための装置を作り上げているのではないかと危惧されている⁵。実際にそのような指摘は、小学校国語科教科書における東アジアの民話教材を巡りなされている。例えば、本研究の研究対象の一つである朝鮮半島由来の民話教材「三年とうげ」について、国語科教育研究者以外の分野の研究者からは、戦前の植民地期朝鮮における帝国日本による植民地政策の一環として既に利用されていたこと、教材の作者が在日朝鮮人児童文学作家であることに触れ、教材「三年とうげ」を通し「韓国・朝鮮(人)らしさ」の言説を読み込ませようとする教育現場に疑問が投げかけられている⁶。また、同じく本研究の研究対象であるモンゴルの民話として有名な教材「スーホの白い馬」についても、本来のモンゴル文化との隔たりが指摘され、その要因として伝承の過程に存在する中国人や日本人の児童文学作家による再話創作の際に埋め込まれたイデオロギーが働いていることが示唆されている⁷。

これらの先行研究で取り上げた教材の共通項として、東アジアに由来する民話であり、その背景に複雑な伝承過程を有しているということ、また児童文学作家によって再話創作された作品が教材化されたものであるということを挙げるができる。このことは、戦前の帝国日本の植民地政策を含み込んだ東アジアにおける民話の問題、戦後の児童文学作家による再話創作活動によって生み出された共同体としての民族の記憶の問題、そして教科書を通し子どもや児童文化へと流布させた教育の問題といった重要な諸問題を含み込んでいるということでもある。すなわち上述した東アジアに由来する民話教材について、単なる一教材の問題と見做すのではなく、日本を含み込んだ東アジアにおける、民話を利用した教育の有り様と在り方について、その背景に存在する様々なコンテクストを含み込んだ歴史的研究を、国語科教育研究の分野においても行うべきであるといえる。

¹幾田伸司(2013)「2教科書教材史研究」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』学校図書株式会社,pp.177-184

²府川源一郎(2014)『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究:リテラシー形成メディアの教育文化史』ひつじ書房,p.2

³幾田伸司(2013),pp.177

⁴浜本純逸(2001)『国語教育史研究の展望と課題』『日本教育史研究(20)』,p.82

⁵千田洋幸(2009)『テキストと教育:「読むこと」の変革のために』溪水社,p.203-208

⁶三ツ井崇(2008)「『三年峠』をめぐる政治的コンテクスト:朝鮮総督府版朝鮮語教科書への採用の意味(京都における日本近代文学の生成と展開)」、『佛教大学総合研究所紀要(2008(別冊))』,p.275-294

⁷ミンガド・ボラグ(2016)「『スーホの白い馬』の真実 モンゴル・中国・日本それぞれの姿」風響社

II. 研究の目的

そこで、本研究では東アジアの民話教材を対象に〈教育文化史〉的視点からアプローチを行うことで、その背景に存在する様々な問題群を解明することを目的とする。具体的には、2018年現在小学校国語科教科書に掲載されている東アジアの民話教材「三年とうげ」・「うさぎのさいばん」・「スーホの白い馬」について、通時的・共時的な観点から分析する。その上で明らかになった教材・作品の歴史的背景から見えてくる教育・文化・歴史に関する問題を検討し、東アジアの民話教材を利用した、教育の有り様と在り方について考察する。

III. 研究の方法

上述した研究の目的を達成するため、本研究において明らかにしたい諸課題を㉗～㉜に示した。

- ㉗〈教育文化史〉研究の必要性について実証すること
- ㉘それぞれの東アジアの民話教材について〈教育文化史〉を記述すること
- ㉙それぞれの東アジアの民話教材に内在する問題について明らかにすること
- ㉚東アジアの民話教材の特質について三事例を重ね合わせ検討すること

上述した諸課題を達成するため、以下に示す手順【図1】を踏まえ、研究を進めていく。

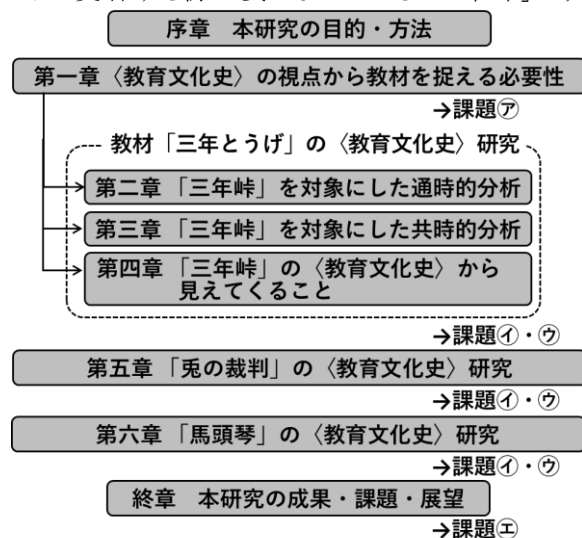
第一章では、教材を〈教育文化史〉的視点から捉えることの必要性について検証する(課題㉗)。

まず、教材「三年とうげ」について、国語科教育研究の内外からの先行研究を整理する。その上で国語科教育の場における教材の歴史的背景への視点の欠如によって国語科教育以外の場から論争が巻き起こされた事例である、教材「最後の授業」を取り上げる。教材の歴史的背景を捉えることの重要性について再確認し、では実際にどのようにすれば捉えることが可能なのかを、「教育文化史」という歴史叙述を用いた先行研究を取り上げ検討する。また「学校文化史」など類似する概念についても取り上げ、本研究における〈教育文化史〉の枠組みを仮設する。

第二章・第三章では、教材「三年とうげ」(「三年峠」)についての〈教育文化史〉を記述する(課題㉘)。まず第二章では通時的観点をを用い、近世日本・植民地期朝鮮・戦後日本・戦後韓国における民話「三年峠」のヴァリエント(異本)の変遷を作品史として記述する。その上でいつかのヴァリエントを選出し、その変容について言語的側面に着目し、テキスト内部から緻密に捉えていく。第三章では、第二章から明らかになった、テキストが変容する際に要となっている「三年峠」のヴァリエントについて、共時的観点からその歴史的背景を分析していく。ヴァリエントの改作の要因について、研究分野を横断する形で、多角的な視点から明らかにする。

第四章では、民話「三年峠」の〈教育文化史〉から描き出されたことについて整理し、ヴァリエントの改作・継承の様相、またそこに携わった媒介者らについて検討する。その上で、東アジアの民話教材に内在する問題について「三年峠」の〈教育文化史〉から見えてきたことを踏まえ明らかにする(課題㉙)。

第五章・第六章では、教材「うさぎのさいば



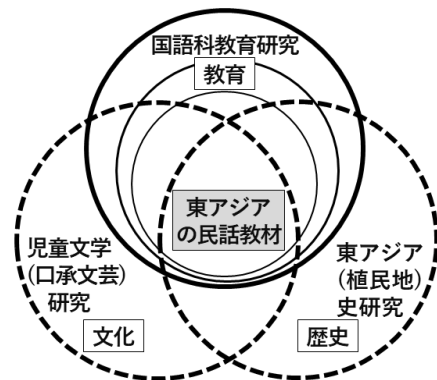
【図1】本研究の構成および対応する課題

ん)、「兎の裁判」及び教材「スーホの白い馬」(「馬頭琴」)の〈教育文化史〉研究を行う。民話「三年峠」の〈教育文化史〉研究と同じく、共時的検討・通時的検討からヴァリエントの改作・継承の様相を描き出し、その要因を分析する。そして、東アジアの民話教材に内在する問題について、〈教育文化史〉から見えてきたことを踏まえ明らかにする(課題①・②)。

終章では、「三年峠」・「兎の裁判」・「馬頭琴」の〈教育文化史〉研究から見えてきた、東アジアの民話教材を巡る教育・文化・歴史に関する問題について、総合的な考察を加える(課題③)。その上で、本研究の成果と課題を明らかにし、今後の研究の方向性について示す。

IV. 研究の位置・意義

本研究は、東アジアの民話教材の歴史的背景を明らかにするという点では国語教科書教材史の一環として位置づけることが出来る。一方で、これまで述べてきたように本研究の目指すところは、狭義的な教材史研究に留まらず、東アジアを単位とした観点から対象を捉えるところにある。よって本研究は国語科教育研究、児童文学(口承文芸)研究、東アジア(植民地)史研究、これら三つの研究分野に跨った上に成り立つものであると考えられる【図2】。



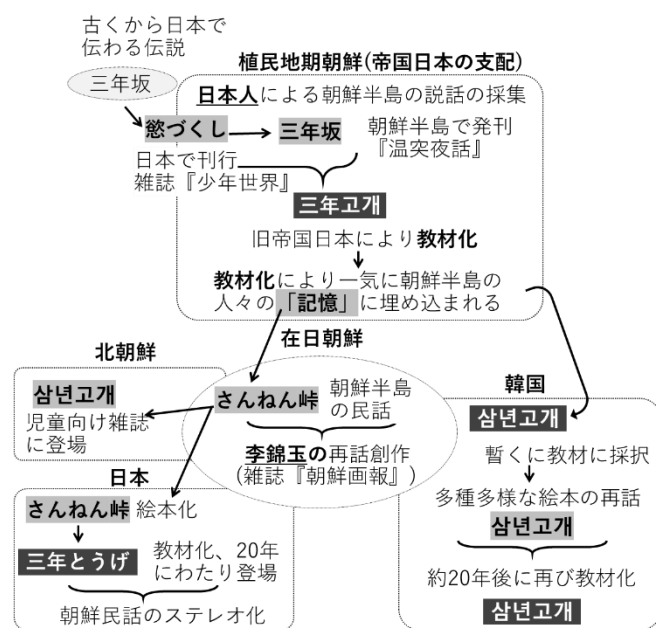
【図2】 本研究の位置

本研究の意義の一つは、それぞれの研究分野の実績と課題を踏まえ、東アジアの民話教材を主軸とした〈教育文化史〉の叙述を行うことで解決を図る点である。見出される教材・作品の歴史的背景から見えてくる問題を、東アジアの教育・文化・歴史に関する問題と結び付けて捉える視点はこれまでの研究では希薄であり、あくまで個別事例の検討といった狭義的な枠組みに留まっている。東アジアの民話教材が、民族に関する共同体の記憶の槽、すなわち東アジアに関する言説を生み出す装置であることを本研究から明らかにしていく。

V. 本研究の成果

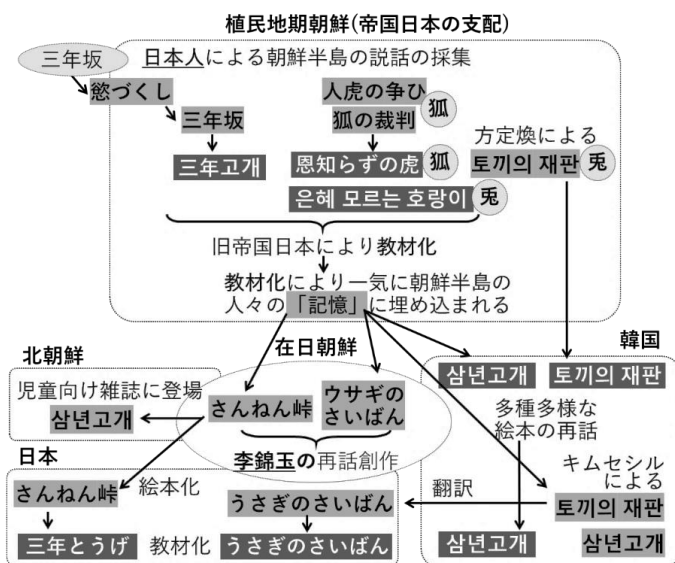
本研究の成果は次の通りである。

第一節では、「三年峠」、「三年峠」と「兎の裁判」(朝鮮半島の民話)、「三年峠」と「兎の裁判」と「馬頭琴」(東アジアの民話)の〈教育文化史〉を重ね合わせ、本研究で明らかにできたことを整理した。「三年峠」の〈教育文化史〉をまとめると【図3】のようになる。現在の我々の元に民話「三年峠」が届くまでに大きな役割を果たしたのとして、「資料」と「記憶」、そしてそれを伝達する「媒介者」の存在が挙げられる。「資料」の通時的配列および影響関係に



【図3】 「三年峠」の民話の〈教育文化史〉研究のまとめ

については第二章で明らかにした通りである。1917年の『少年世界』における「慾尽くし」から始まり、朝鮮総督府による教材「三年고개」を経て、現在の日本の小学校国語教科書の教材「三年とうげ」および韓国の国定小学校国語教科書の教材「삼년고개」まで派生していることが判明した。またその派生において大きな影響を及ぼしたのは教材「三年고개」であることも明らかにすることができた。「資料」は当然であるが耳も口も持たない。「資料」から「資料」へとバトンを渡す役割を果たしたのが「媒介者」そしてそれを取り巻くコンテキストである。これに焦点を当てたのが第三章である。「媒介者」らは、その時代・地域によって「三年峠」を「再話」という形で改作し、意識的また無意識的にその「資料」に触れた人々の「記憶」を塗り替えている。特に不特定多数の集団の「記憶」に影響を及ぼす教科書教材の齎した影響は大きい。日本から朝鮮に対するオリエンタリズム、朝鮮を日本の一部としようとする内鮮融和、日本と朝鮮の狭間に置かれた在日朝鮮というディアスポラ、そして現在の国際社会に基づく異文化理解にいか「三年峠」が利用されてきたか。第四章では「三年峠」の内在する問題について、民話・教材・東アジアとしての側面から追及した。



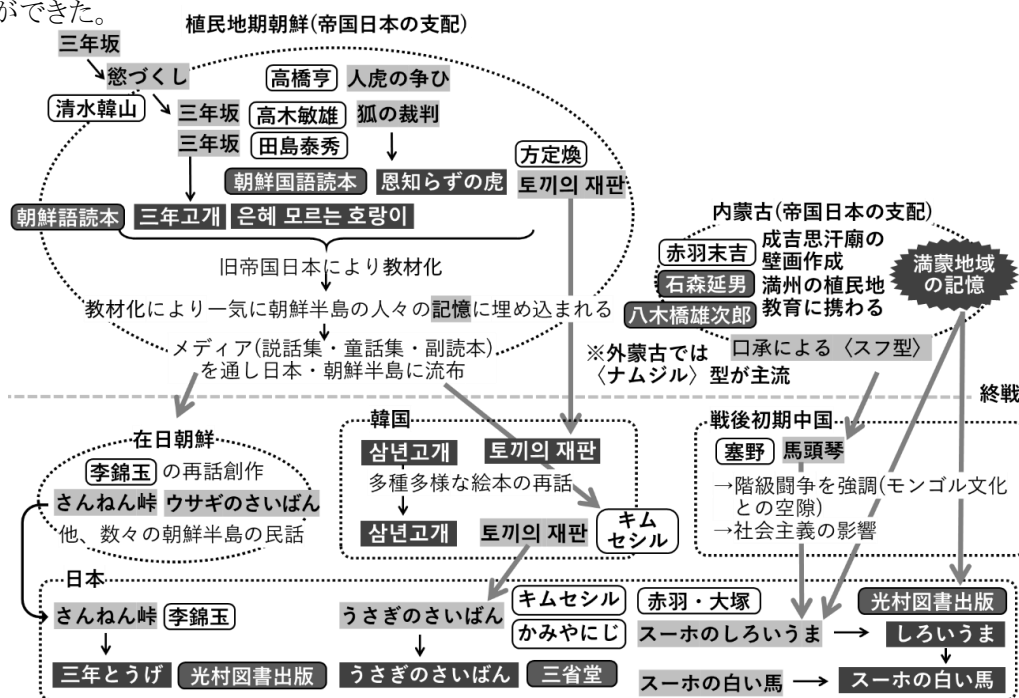
【図4】朝鮮半島の民話の〈教育文化史〉研究のまとめ

次、「兎の裁判」の〈教育文化史〉研究で明らかになったことを踏まえ、朝鮮半島の民話の〈教育文化史〉から何が見出せるのかを明らかにした。【図4】に「兎の裁判」の〈教育文化史〉を加えると【図4】ようになる。第五章では、「兎の裁判」の〈教育文化史〉研究から、教材「うさぎのさいばん」もまた植民地期朝鮮において教材化されていることが判明した。「三年峠」と異なるのは、朝鮮第二期『朝鮮国語読本』と朝鮮第三期『朝鮮語読本』において教材化なされており、かつその内容に差異が見られるという点である。「兎の裁判」は、題名にも見られる最終裁判官の動物が、主に兎と狐とする二つの類型が存在していた。教材「恩知らずの虎」に代表される狐を最終裁判官とするヴァリエントは戦前の多くのヴァリエントに影響を与える。戦後は、教材「(은혜 모르는 호랑이)」や方定煥による「토끼의 재판」に見られる兎を最終裁判官とするものが主流となり流布していく。しかしながら、教材「恩知らずの虎」に内在する、教訓「感恩生活の美しさ」を学習者に教え込もうとする姿勢は、日本の小学校国語教科書教材「うさぎのさいばん」によって継承されていた。教訓「感恩生活の美しさ」は先にも述べた植民地教育政策の一つ「内鮮融和」によって強調されたものであり、一見直接的な影響を受けていないように見える教材「うさぎのさいばん」によって再生産されたことになる。その背景には、媒介者による「記憶」がその影響の一つであることが考えられる。

このように、2018年現在、日本の小学校国語教科書に見られる朝鮮半島の民話教材は、それぞれ異なる文脈を持つものの、朝鮮総督府によって塗り替えられた「記憶」を継承している

ことが判明した。そして、それぞれの教材は昔から朝鮮半島に伝わる「民族の文化遺産」として教室で扱われ、学習者に学びを広げているのである。また、教材「三年とうげ」の作者である李錦玉は「ウサギのさいばん」についても再話創作しており、一方で教材「うさぎのさいばん」の原作者であるキム・セシルもまた「三年峠」を再話創作している。これらの民話は、児童文学作家にとって再話創作のしやすいものであり、それだけ人々の「記憶」に植え込まれたものであるともいえる。そして戦前・戦後を問わずこれらの民話を教材化した国語教育者は、「三年峠」や「兎の裁判」に内在する教訓、幼い子供が知恵で老人を助ける「孝行譚」や、恩知らずの虎を賢い動物が懲らしめる「勸善懲悪」を、その地域・時代の「教育に相応しい」と感じ、子ども達に教授するための読み物として取り上げている。そして、戦前は内鮮融和に基づく民話の利用、戦後は異文化理解に基づく民話の利用を試みたところに、共通性が浮かび上がる。

第六章で行った「馬頭琴」の〈教育文化史〉研究を加え、「三年峠」・「兎の裁判」・「馬頭琴」の〈教育文化史〉研究をまとめると【図 5】ようになった。「馬頭琴」は、他の二つの民話とは異なり、戦後に登場している。しかし、初めて文字化された馬頭琴由来伝説である塞野の「馬頭琴」は戦後初期中国を巡る政治的思潮の影響もあり、階級闘争の主題が強調され、モンゴル文化との空隙が見られるものであった。さらに、それを人間と動物の友情物語として書き換えたのが大塚・赤羽による「スーホの白い馬」である。その再話創作の登場や教材化の背景には、旧満州国引揚者らによる満蒙地域への郷愁の念が深く関わっていることが判明した。具体的には、「スーホの白い馬」の絵画担当である赤羽末吉の植民地政策の一環である成吉思汗廟の壁画制作の経験が「モンゴルを日本の子供達に見せたい」という思いを生み、「スーホの白い馬」誕生のきっかけを作ることとなった。また、戦後初期の光村図書出版の教科書作成に携わり、教材「しろいうま」が登場した 1965 年に編集委員を務めていた石森延男・八木橋雄次郎もまた旧満州国の引揚者であり、当時の植民地教育に深く関わっていた。また両者共に満州児童文学の創作活動を行っており、その経験や満蒙地域の広大な景色への懐古の念が、中学校における教材「草原万里」、そして教材「スーホの白い馬(しろいうま)」が登場したことに繋がる文脈を明らかにすることができた。



【図 5】 東アジアの民話の〈教育文化史〉研究のまとめ

それぞれの民話は異なる文脈を有しながらも、時代と共に改作され、個人と集団の「記憶」の塗り替えと形成を繰り返す、そして媒介者によって利用されてきたという共通項が存在することが判明した。また、再話や再話創作の共通項として、挿話(要素群)には手を加えられず、モチーフ(基本的要素)に手が加えられているということが判明した。そして、登場人物(医者→老人、狐→兎、蘇和→スーホ)を始めとするモチーフの変容が、民話全体の主題の変容にも繋がり、民話そのものに対するイメージを塗り替えている。しかしながら挿話については手を加えられていないため、読み手に同じ民話だという錯覚を引き起こしてしまう。また変更・増加されたモチーフには、媒介者による想が意識・無意識的に入り込んでいる。それは、民話が舞台としている地域の民族観、教訓などに見られる「こういう人間たるべき」という価値観、翻訳や再話の際に見られる言語観、などである。これらの要素は読者対象や掲載される媒体によって次々と入れ替えられていく。こうして、内在する様々な要素に見られる「観」が、あたかも昔から存在し言い伝えられてきたかのように現在の我々の目に映り、そこに疑う余地を持つことなく、読み手に受容されてしまうのである。こうしてみると、民話の「民」の部分には時代状況によって「皇民」・「人民」・「国民」と、その時代が理想とする「民」像が当てはめられていることがわかる。そして国語教育は、そうした理想の「民」像を鮮明に描き出す「民話」を教材化することで、その時代に相応しいと思われる人間像を学習者に形成しようと試みたといえるのである。

VI.本研究の課題

本研究の課題と展望については次の通りである。

一点目は、東アジアの民話について、2018年度現在使用されているものを取り上げたため、朝鮮半島とモンゴルという特定の地域の検討に偏ってしまった点である。一方で現在までに小学校国語科教科書において掲載されたことのある東アジアの民話は、圧倒的に朝鮮半島の民話が多く、またその作品の殆どは李錦玉によって手掛けられたものだという現状が存在する。このような教科書教材に関する媒介者の利権の問題や、特定の地域への偏りについて、今後も考察していく必要がある。そして、東アジアの文化圏という視点から日本の民話についても〈教育文化史〉を記述していく必要があると考える。自国の民話をどのように国語教育が利用してきたのか、改めて明らかにしていかなければならないと考える。

二点目は、東アジアの民話を巡る〈教育文化史〉について、学習者の読みの様相を鮮明には描き出せなかった点である。本章の総合考察でも述べたように、東アジアの民話が教材化された時、どのような「記憶」を学習者に形成しているのか、具体的様相を学習者の個体史から読み取っていく必要があると言える。特に戦前の資料については散逸しているものが多く、実際に東アジアの民話教材をどのように読み、どのような学びを得たかについては、趣意書や教育雑誌における指導事項や教材研究の記事から推察するに留まってしまった。この点については、さらなる資料収集を重ね、学習者の視点も含めた〈教育文化史〉の構築をさらに目指したいと考える。

三点目は、東アジア文化圏におけるそれぞれの地域における民話について、〈教育文化史〉について明らかにすることができなかった点である。すなわち、戦前の帝国日本の影響を少なからず受けた、それぞれの地域における自国の民話が、その後どのように派生していったのか、鮮明な〈教育文化史〉を描き出したとは言い難い。これについては、その国・地域の国語科教育研究者との協力が必要不可欠であるといえる。それぞれの国・地域における民話を巡る〈教育文化史〉から、東アジア文化圏における国語科教育の、戦前から戦後への断絶・継承・再構築の様相が見て取れる可能性があるといえ、今後も検討していく必要がある。

Ⅶ.本研究の展望

本研究の展望は次の通りである。本研究により、東アジア、特に朝鮮半島・内蒙古を題材にした民話教材に内在する問題について様々な視点から明らかにすることができた。特に東アジアにおける民話は、戦前の植民地を中心に、帝国日本による政治・教育に利用され、また戦後、児童文学者による再話創作活動や国語科教育者による教材化により「創られた民族の記憶」が形成・伝承されていったということが明らかになった。しかし、これまでの研究では、具体的な民話の検討やその周辺に焦点が当てられているのみであって、東アジア全体の問題として捉えられているわけではない。そこで、「東アジア文化圏」という枠組みから、民話がどのように民族の記憶の捏造と伝承に関わっていったか、被植民地国(台湾・満州・南洋諸島)および日本における、教科書などのメディアを中心に、通時的かつ共時的な分析をさらに進めていく必要がある。また、民話が生成され、教材化され児童文化へと蔓延する背景には、民族政策を巡る政治的思想、民話を巡る民俗学・国語教育学・児童文学の様相が関わっている。そこで、戦前の東アジアにおける民族政策の具体的内実や、東アジアの民話を教育に用い、児童文化に広げていく上で大きな影響力を与えた人物に焦点を当て検討する必要がある。今、国際化が進行し近隣諸国との関係が重視される中で、東アジア文化圏における民話に関する問題を取り上げ検討することは、日本を含む東アジア文化圏における民話のこれからの在り方、そして正しい異文化理解を促進していく上で重要な視点を与えていくことに繋がると考えられる。

Ⅷ.主要参考文献

- 板垣竜太・鄭智泳・岩崎稔(2013)『東アジアの記憶の場』河出書房新社
大竹聖美(2008)『植民地期朝鮮と児童文化:近代日韓児童文化・文学関係史研究』社会評論社
金広植(2015)『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』勉誠出版
金成妍(2010)『越境する文学:朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動』花書院
崔仁鶴(1976)『韓国昔話の研究:その理論とタイプインデックス』弘文堂
府川源一郎(1992)『消えた「最後の授業」:言葉・国家・教育』大修館書店
藤井麻湖(2003)『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』風響社
ミンガド・ボラグ(2016)『「スーホの白い馬」の真実:モンゴル・中国・日本それぞれの姿』風響社
安田敏朗(1997)『帝国日本の言語編制』世織書房
李淑子(1985)『教科書に描かれた朝鮮と日本:朝鮮における初等教科書の推移(1895-1979)』ほるぷ出版
石森延男(1972)「満州児童文学回想」『児童文学研究(2)』,p.30-33
北川知子(1994)「朝鮮総督府編纂『普通学校国語讀本』の研究:朝鮮民話・伝説に取材した教材についての一考察」『国語教育学研究誌』pp.1-22
呉羽長(1990)「スーホの白い馬」の教材論的考察『富山大学教育実践研究指導センター紀要 6』pp.67-78
成實朋子(2009)「スーホの白い馬」と中国の民間故事「馬頭琴」について『学大国文(52)』pp.61-76
三ツ井崇(2013)「引き継がれるテキスト,読み換えられるテキスト:「三年峠」論・補遺」『韓国朝鮮文化研究:研究紀要(12)』pp.1-19